

生徒の理解力を上げるICTの活用法

鈴木 悟

(東京都小笠原村立小笠原中学校)

1. ICT活用で悩み解消

- 教師がプリントや教科書で説明している箇所を見つけられない。
- 教師の説明が理解できず、周囲に確認しないと課題に取り組めない。
- いったん理解できなくなると課題への取り組みをあきらめてしまう。
- 習熟度別学習等でリーダーとなるべき生徒が少ないため、学習意欲がわからない。

このような生徒に対し、机間巡視で個別対応し支援していくことによって、前向きに取り組めるようになることも少なくない。しかし、1時間の授業のなかで1人の教師が支援できる人数と時間は限られている。さらに、授業時数や進度まで考慮すると、個別指導に多くの時間は割けず、生徒に十分な支援ができていたとは言いがたい。

これら一連の問題を解決するための手段としてICTがある。ICTの適切な活用は、生徒にも教師にも大きな効果を生む。ここでは実物投影機、プレゼンテーションソフトの活用について紹介する。

2. 実物投影機

実物投影機(書画カメラ)は、生徒が手元で見ている教科書やプリントをテレビ画面(スクリーン)にそのまま映し出すことができる。教師は画面を指示しながら説明するので、生徒は口頭による説明に加えて視聴覚的にも説明を受けることとなり、個別指導されているような感覚になる。

その結果、教師は説明を短時間で済ませられ、他の活動に多くの時間を割くことができる。また生徒は、「自分の力で取り組める」「授業についていけて

いる」感覚をもてるため、不安が取り除かれ、授業への集中度が高まっていく。

とくに肝心である1年生の入門期。身の回りにあるものの英語(教科書使用)の導入・展開、文字指導(ペンマンシップ使用)では大文字・小文字・文の書き方など基本的な内容をスピーディーに進める必要がある。ここで実物投影機を用いると生徒はしっかり授業についてくる。私の経験では、授業に迷う生徒はいなくなっている。

必ず行われる教科書本文の説明。年度初めに、教師が本文に直接説明を書き加える様子を映し出すことで、生徒はメモの取り方を知る。また、傍線の引き方や直線と波線の使い分けなども確認できる。メモの取り方を習得すると他教科の学習にも役立つ。

その他、プリントを使った説明やワークの答え合わせ、英作文の添削、スピーチ発表の際の写真等の提示、卒業生の作品(壁新聞等)の提示など、授業のすべての場面で実物投影機が使える。

実物投影機を使うことで「できる生徒の思考を削がないか」との懸念もある。しかし、生徒の視線を観察していると、英語が得意な生徒は実物投影機の助けを借りずに自力で取り組んでいる。

また、「実物投影機を使うことで英語のinputの妨げにならないか」との懸念もある。これを払拭するためには、実物投影機を活用する場面を絞ることが必要である。主に教師が日本語で説明する場面に限定し、生徒に英語を聞かせたい場面では、次項で紹介するパワーポイントを有効に使う。英語を聞く量が減らないような、英語をしっかりと聞きとらせるような指導手順、授業計画が必要となる。

実物投影機の活用場面は徐々に減らしていき、最終的には、実物投影機のない教師の口頭の指示や説

明だけで、生徒が授業内容を理解できるようにすることが肝心である。

3. プレゼンテーションソフト

プレゼンテーションソフト（以下、パワーポイント）は、新教材導入の際にそのメリットが際立つ。

授業の中で教師が最も力を入れ、生徒に最も集中させたい場面は新教材導入時である。一方、それは生徒の不安がもっとも高まる場面とも言える。ここでパワーポイントを使うことで、スライドによるわかりやすい導入・説明が可能になり、生徒の集中力も高まり、教師との言葉のやりとりも活発になる。

教師にとっては、手間の軽減がもっとも大きな利点といえる。少人数学習の増加に伴い、1人の教師が複数の学年を教える機会が増え、その分教材準備に費やす時間と手間が増えている。また、時間をかけて作った教材も、その保管に困ったり、翌年使う際に見つけ出したりするのに苦労することもあるが、教材をパワーポイントのスライドにすれば、これらの問題は解決できる。なぜなら、作った教材はすべてデジタルデータであるため、保管に場所を取らず、修正・変更が簡単で、検索性が高いからだ。授業で復習する際や次年度に使う場合には、ファイルを検索し修正を加えるだけで、繰り返し使うことができる。準備段階で教材の提示の流れを確認できるため、授業では、絵を貼る位置にも、(教師の)発話のタイミングにも気を遣わなくて済む。生徒全員顔を常に見て、理解をつかみながら授業ができる。

さらに、デジタルデータであるため、同僚や他校の英語教師とのファイルの共有・交換が簡易であり、より完成度の高い導入教材の作成が可能である。

何をデジタル化するかは簡単で、これまで黒板に貼っていたものを、そのままスライドにするだけである。文法導入・オーラルイントロダクションで使う写真をコピーしてスライドに貼りつけたり、必要に応じて文字や記号をスライドに挿入したりする。

黒板と違い、「一度に全体が見られない」「全体の流れが確認できない」などの欠点もあるが、授業の終わりにスライドのコピーを配布することで、十分にその欠点を補える。スライドのコピーは、家庭での復習やリプロダクションの練習にも使える。

また、教師が授業でパワーポイントを積極的に活用することで、生徒が他の授業でプレゼンテーションを行う際のモデルを提示していることにもなる。ただし、前述のメリットを享受するには、プレゼンテーションソフトを難なく使えることが大前提となるが、生徒でも数時間で操作可能なソフトであるので、教師がそれほど心配するには及ばない。

私がパワーポイントで授業をし始めた頃、多くの方々から以下のような助言を頂いた。「パワーポイントの1枚のスライドに新しい情報(画像)量が多くなると、生徒の意識が絵に集中してしまい、教師の発話に集中しなくなる。結果として、教師が教えたいことから離れて、聞かせたい文(ターゲット文)を聞き流してしまう。」これを踏まえて考えられるスライド作成のポイントは以下の2点である。

- ① 1つの画面を作成する際、必要以上に情報(写真・文字)を入れすぎないこと(写真や文字の精選)。
- ② アニメーション効果の使用は、極力控えること。

4. ICT活用は、生徒自立の一手段

ICTは、使うことが目的ではなく、ICTを活用することで、生徒の授業「内容」の理解が深まり、生徒の自立の一助となることが目的である。授業がわからなければ、家庭学習や自学自習の習慣も身につかない。ICTは「授業をわかりやすくする」+「生徒が自力で解決できる能力を身につける」ことを助け、自学自習を習慣化する一手段なのである。

「ICTを活用しても『授業』であることには変わらないということです。したがって優先されるべきは、情報技術より授業技術になります。子どもたちがわかったとか、できたとか、あるいは深く考えたとかいう状況にならなければ、派手なICTを使っても価値はありません。」(堀田龍也; 玉川大学教職大学院教授)

生徒の学習状況・発達段階に応じてICTを計画的に活用することは言うまでもなく、ICTを生徒たちの思考・判断・表現する機会を生み出す手段として効果的に活用できれば、言語活動が活発になり英語力を高めることにつながっていくと考える。

【参考文献】

高橋 純, 堀田 龍也 (2009). 『すべての子どもがわかる授業づくり—教室でICTを使う—』高陵社書店.